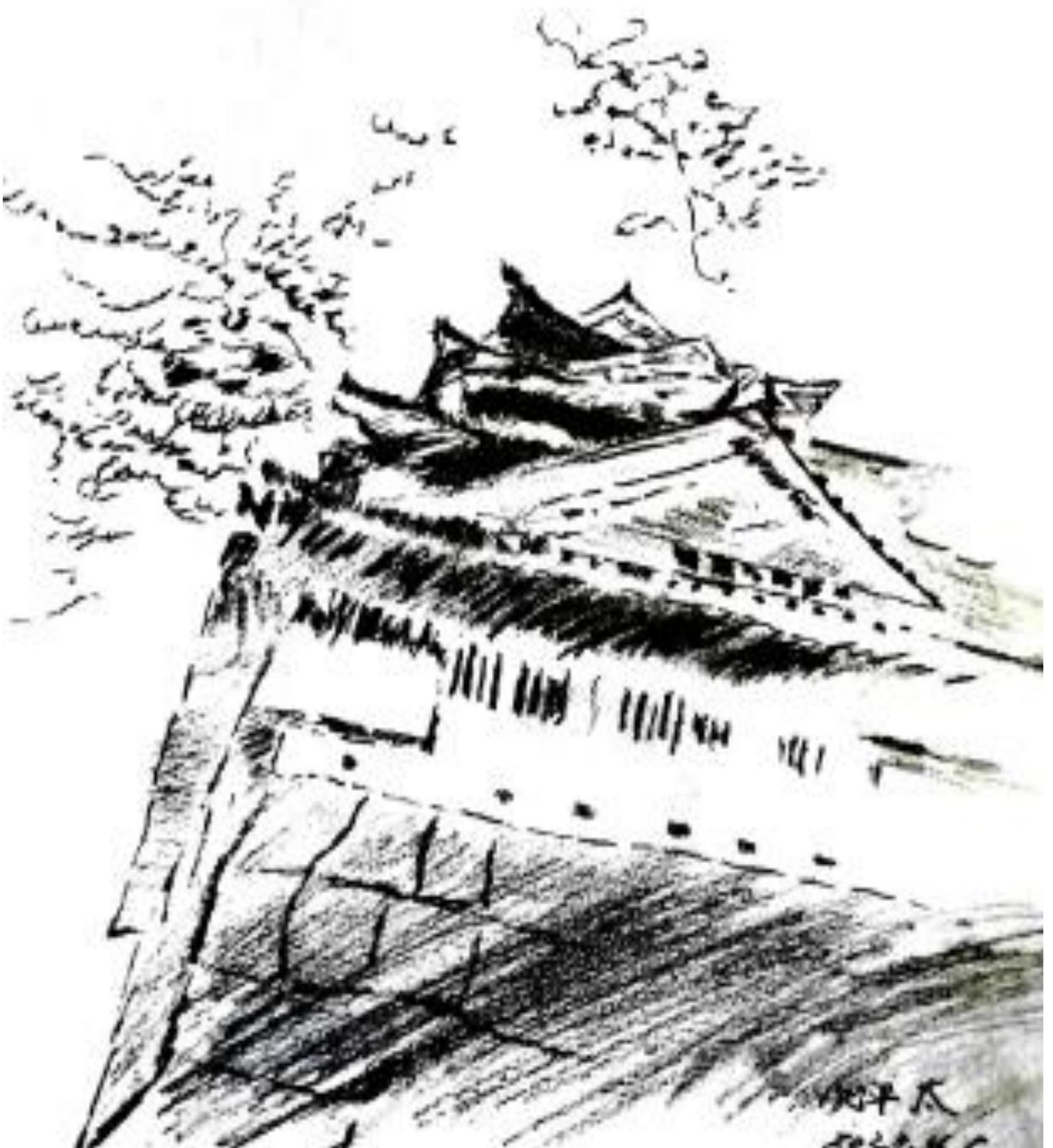


閣守天柳川

2024年12月号



大平 氏
2024年12月

第19回例会 2024年11月15日(金)

投句締切分

お題 「水晶」

平川柳 選

透きとおる玉の向こうに過去が見え
魔女が持つ水晶玉が語る幸
クオーツの奥に秘めたる暗い過去
クオーツが詣でるクオーツの鳥居
ホールインワン水晶玉のおかげです
水晶のハンコで運を呼び寄せる
水晶体過労死しそう白寿来て
汚れ身を浄化してくれ水晶よ
水晶に映す吾が身の未来地図
透明な恋見届けた水晶体
少年の水晶未来無限大
未来図を水晶に訊き待つ答

(五客)

佳5 水晶の臍は傘寿から白寿
佳4 水晶の雨の音ですトツカータ
佳3 水晶のような目をして射貫く猫
佳2 母一人子一人の色アメジスト
佳1 瞳にもパワー埋め込む木彫り仏

美代
松谷由夏
久世高鷲
春田敏晴
小林満寿夫
岡野とら丸
加山勝久
勘兵衛
井澤壽峰
真鍋心平太
山野寿之
松島きよみ

山野寿之
春田敏晴
林ともこ
真鍋心平太
ルイ

(三才)

人 母は水晶私が珊瑚父が逝く 松島きよみ
地 わたくしの水晶探す旅に出る 直子
天 水晶の母の匂いの残る数珠 秋田あかり
軸 水晶の夜にユダヤの曼殊沙華 平川柳

(選評)

人の句

この川柳は「母は水晶」「私が珊瑚」「父が逝く」の「七七五」の「内在律」で構成されています。注目される「水晶」も「珊瑚」も「メタファー」(隠喩)として用いられていることです。「珊瑚」は強い生命力や健康・長寿の象徴。また「水晶は塵を受けず」という言葉があるように「母」はどこまでも「水晶」のように清らかな人」で子である私は「健康」なのに「父」はすでにこの世にはいない。父を亡くした作者の深い「内なる哀しみ」が表白された抒情川柳です。

地の句

「パワーストーン」としての「水晶」は心身の活性化や潜在能力の開花に力を貸してくれます。また目的や前に進むべき道をより明確にし、夢の実現をサポートしてくれる霊石です。作者はそうした霊力をもつ「わたくしの水晶」を「探す旅に出る」のです。この川柳から作者が自分の人生の進むべき道を模索する姿が目に見えられました。何歳になってもこの作者のように私も自己の進むべき道を探る哲学的な姿勢を失わずにこれからも川柳の道を生きていきたいと強く思いました。

天の句

水晶は古くから精霊が宿る石とされ、日本では霊石として神聖な儀式などに用いられてきました。また水晶は「クオーツ」や「クリスタル」とも呼ばれ、その水晶でできた数珠は「千億倍の福」があると信じられています。作者の母は、その「水晶」の「数珠」を愛用しており、作者はその「水晶」に「母の匂い」が残っていると語っています。この「水晶」と「母の匂い」の「残る数珠」の「く取り合わせ」に「人肌のポエジー」といえる川柳の詩情を強く感じました。

お題 「貰う」

春田 敏晴 選

晩年の静かな時間手に入れる

仲良くもないと思うがもらい風邪

生前に貰った形見つけ送る

情報を貰う近所の散髪屋

貰うよりあげるのがいい言った妻

一輪の花に添えてた文も読む

父母から貰った愛を子に注ぐ

絵手紙の柿や栗から貰う秋

妻貰う猫の子貰うわけでなく

幸せを他人のヒントから貰う

継続のメダルとなった参加賞

(五客)

佳5 不思議です出会いと別れ運貰う

佳4 優しさを貰って生きる老いの道

佳3 秋を楽しむあと一か月ほしい

佳2 マイナンバー貰う写真も皺だらけ

秋田あかり

青空

三枝なな

山野寿之

佐野正邦

久世高鷺

堀内きみ子

山野寿之

岩原一角

東尾由子

三枝なな

東尾由子

美代

信子

武智三成

佳1 百合の花貰ってしまうそんな罪

直子

(三才)

人 五十五夢と希望をありがとう

地 元気かと昼の月から降るエール

天 痛さより愛を貰った師のゲンコ

軸 遠ければまだ文も見ず父母の国

松島きよみ

秋田あかり

久世高鷺

春田敏晴

(選評)

人の句

五十五、夢と現実かと思つたら夢と希望だというのが
欲張りで面白いですね。

これなら幾らでも頑張れそうです。

地の句

昼の月、ひっそり出ていますからエールも派手ではなく
そつと貰えるところが今にふさわしく良いと思いました。

天の句

もうこんな風に叱ってくれる師は
一人も居ないと気付く歳になりました。
自分がこういう師に成れているかと
身が引き締まる思いもしました

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

つるべ落とし続きは明日立ち話

大輪の菊にかかっている手塩

造花より枯れた生花味がある

杖ついで仲良しこよし手もつなぎ

記念日を忘れてで夫はケーキ食べ

いにしえの人が歌った恋模様

猪も回れ右する畑不作

傷付けてしまったのかも栗の花

強気より人間性が吐く弱気

温暖化野分の頃を懐かしみ

虚無僧の尺八一音成仏

忘れる事出来ない恋を胸の奥

いつものパン50円引きよと姉笑顔

貧しさの中で聞いてた夜鳴きそば

(五客)

佳5 タワマンの粗食景色がご馳走に

佳4 夜中まで真意を追っている暇

佳3 満ち足りて両手袋の温かさ

佳2 塗り絵からデイのばあさん遠い目に

秋田あかり

山野寿之

東尾由子

青空

美代

久世高鷺

堀内きみ子

直子

久世高鷺

加山勝久

平川柳

松谷由夏

波部珀兎

林ともこ

松島きよみ

小林満寿夫

林ともこ

武智三成

(三才)

佳1 点々が連なっていき生きざまに

人 楽しみは南海トラフ見ず白寿

地 やさしさは愛だと思ふ無塩パン

天 貧しかった悔しかったが兄の糧

軸 灯見えてくれば大津や旅終わる

佐野正邦

加山勝久

秋田あかり

三枝なな

真鍋心平太

(選評)

人の句

三十年以内に南海トラフが来るという。

長生きはしたいが地震はごめんという虫の良い願いだが、

大地震に対して人は無力なのだから願うしかない。

地の句

腎臓で三度、延べ八カ月入院している。

腎臓で入院すると朝は無塩パンになるのだが

何も足さない、何も引かない、病を癒すためのパンである。

天の句

義兄が九州に居る。数年に一度しか会えず

長く話したことは無いのだが、私より十歳近く歳上で

満州から引き上げるとき弟を亡くした。

何故かこの句を見て義兄のことだと思った。

お題 「自転車」

互選

1点

補助輪が取れて満面得意顔
補助が取れパパがあと押す三歳児
自転車でよろける歳になりました
夕陽背に急かす自転車おさげ髪
自転車で出前配達昭和絵

佐野正邦
美代
岩原一角
林ともこ

2点

おばちゃんもヘルメットが必須アイテムに
自転車が50年ぶり我が足こ
ダメですよながら運転自転車も
八十路坂サイクリングで若返る
歩くより自転車が楽老いの足
力持ち見えるアシスト乗る老母
HOPパー充電ペダルも心も軽くなり
チャリンコで友と駄弁った帰り道
ペダル踏み心軽やか秋の野路
子が乗れて親が乗れない一輪車
自転車も飲酒運転仲間入り

堀内きみ子
波部珀兎
三枝なな
信子
東尾由子
秋田あかり
佐野正邦
波部珀兎
久世高鷲

3点

二人乗り背に顔と手と青い風
ママチャリが安売り求め駆け巡る
補助輪をはずし息子の得意顔
自転車に積んでいたのは家族
自転車のナスやキューリは野良の汗

久世高鷲
加山勝久
浜脇蓬生
松島きよみ
松谷由夏
松谷由夏
真鍋心平太
山野寿之

4点

古傷の猛者が溜まった駐輪場
茜雲諦めたくて漕ぐペダル
自転車で追い越してゆく君のこと

ルイ
直子
直子

5点

自転車で巡る昭和の紙芝居
チャリンコもながらスマホで青切符
ママチャリに三人乗りでパパ走る
ばあちゃんはけんけん乗りができるんだ
銀輪の笑顔弾ける通学路
前後ろ子乗せママチャリたくましく

井澤壽峰
加山勝久
浜脇蓬生
三枝なな
岡野とら丸
美代

6点

飛鳥路の秋を堪能するペダル
渋滞へ風を掴んで漕ぐペダル
売れ残る自転車逆さ吊りの刑
自転車の尾灯離れてゆく別れ
自転車を止めて親父のへぼ将棋

小林満寿夫
秋田あかり
山野寿之
平川柳
平川柳

7点

自転車を止めて親父のへぼ将棋
日本兵マレー蘭印駆け抜けた

春田敏晴
春田敏晴

8点

老いたなと古いペダルに笑われる

真鍋心平太

10点

補助輪を外して僕の小宇宙

林ともこ

18点

坂道をくの字くの字で漕ぐペダル

岡野とら丸

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。
得点が空白のものは前行の句と同得点です。

お題 「葉」 短句

互選

1点

枯葉カサカサ師走バタバタ
寄り添う人と葉陰の中へ
新種の葉っぱ蜜柑色付く
蓮の葉の上住み着く蛙
風に吹かれて落葉のダンス
葉書値上げで賀状卒業
ホーホケキョーと光る言の葉
銃眼歴に楓劣る

2点

若葉枯葉も春を待つ色
愛も恋もは言葉でわかる
紅葉謳うバイオリンの音色
優しき言葉詐欺電話口
昔ヒ口ポン今なら葉っぱ
紅葉の秋映える山々
虫食い捨てて菜っ葉炊く夕
ぬれ落ち葉昔の仕事懐かしみ
ハッパフミフミ歩いた昭和
葉脈が揺れ胸がざわつく
葉っぱパンパン山椒の気持ち
秋の日暮れにはらはら落ちる
落ち葉を集め焼き芋ほこり
温い言葉が心を満たす
青葉若葉もいずれば枯葉
月桂樹の葉シチューぐつぐつ

3点

堀内きみ子
久世高鷺
武智三成
井澤壽峰
松谷由夏
岡野とら丸
春田敏晴
武智三成
東尾由子
東尾由子
小林満寿夫
美代
春田敏晴
井澤壽峰
青空
加山勝久
真鍋心平太
林ともこ
三枝なな
浜脇蓬生
堀内きみ子
松谷由夏
岡野とら丸
波部珀兎

言葉ひとつで気持ち和らぐ
物語へとさそう枯れ葉よ

林ともこ
信子

4点

父の古書からイチヨウ葉ハラリ
覚悟はいいか病葉を踏む
葉を落としてつ眠りゆく木々
フレデイが散り電飾が光る
銀杏の黄色流れる車窓

波部珀兎
直子
美代
三枝なな
青空

5点

青葉が外す私の手錠
青葉の森で羽化する少女
恋に破れた枯葉ちりぬる
猛暑越え桐一葉舞い落ち

真鍋心平太
平川柳

9点

風はかさこそ枯葉舞う私語

久世高鷺
松島きよみ
山野寿之

12点

嘘だったのか透ける葉脈
前頭葉を食べている虫

直子
平川柳

13点

紡ぐ言の葉編む一行詩

山野寿之

今月の投句者(27名 敬称略 太字のかたは初参加です。)

井澤壽峰 加山勝久 勘兵衛 春田敏晴 松島きよみ
山野寿之 岩原一角 信子 武智三成 小林満寿夫
平川柳 ルイ 三枝なな 青空 林ともこ
秋田あかり 美代 直子 松谷由夏 岡野とら丸
久世高鷺 波部珀兎 浜脇蓬生 真鍋心平太
堀内きみ子 佐野正邦 東尾由子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございました。

川柳天守閣 連載 評論 「現代川柳の詩学」を考える ⑪

―川柳の技法(6) 比喩・擬物法・寓喩法―

―「古川柳」から現代川柳へ―

十八世川柳宗家 閑成庵川柳 平 川柳 (東京川柳会主宰)

次に「擬物法」をご紹介したいと思います。「擬物法」は「擬人法」と反対に人間を「物」のように表現する修辭法のひとつです。例えば、物知りな人物を「字引き」に喩えて「生き字引」と表現し、劇団を代表する主演俳優を「一座の看板」と喩えたりする方法が「擬物法」の比喩表現です。

『誹風 柳多留』(初篇)に次のような「擬物法」を用いた「古川柳」が収録されています。

唐紙へ母の意見をたてつける

この前句は「わがままな事、わがままな事」です。この川柳で「母の意見」をじつと我慢して聞いている主体は息子でしょうか、娘でしょうか。解釈は2つありますが、私は娘と解釈します。「唐紙」は「唐紙障子」の略。

「襖(ふすま)」の別称。「わがまま」な娘は「母の意見」をじつと聞いていましたが、くどい「母の意見」に我慢しきれず、つい「唐紙」を荒々しく閉めて立ち去ります。「母の意見」への娘の反撥を「唐紙」に代弁させている「わがまま」な娘の姿を描いています。

また吉川英治(1892・1962)の次の川柳の「豆の蔓」も「擬物法」を用いた近代川柳です。「雉子郎」は吉川英治の川柳号です。

この先を考へてゐる豆の蔓

吉川 雉子郎

田口麦彦の『現代川柳入門』(飯塚書店)では、この「擬物法」の例として次の現代川柳を取り上げています。

無印になってあなたのまあるい背

安石 理石

「寓喩法」(アレゴリー)は、あるものや出来事をそれと類似した別のもので暗示的、象徴的に表現する比喩法。「アレゴリー」(allegory)の語源はギリシア語で「別の

物を語る」という意味の「アレゴリア」に由来します。この比喩法は抽象的な概念や思想を具体的な形象によって暗示する表現法です。

イソップ童話に「蟻とキリギリス」という寓話がありますが、例えば、「人の一生」を「蟻の一生」という言い方が「寓喩法」です。

「寓喩法」を用いた現代川柳に次の川柳があります。

蟻食ひの糞殺された蟻ばかり 鶴 彬

この「寓喩法」を用いた川柳は反戦川柳作家の鶴彬（1909・1938）が1937（昭和12）年の7月発行の『川柳人』（278号）の「同人創作」欄に「蟻食ひ」と題し、発表した次の「連作川柳」の内の一句です。

正直に働く蟻を食ふかもの

蟻たべた腹のへるまで寝るいびき

蟻食ひの糞殺された蟻ばかり

蟻食ひの舌がとどかぬ地下の蟻

蟻の巣を掘る蟻食ひの爪とがれ

やがて墓穴となる蟻の巣を掘る蟻食ひ

巣に籠る蟻にたくわへ尽きてくる

たべものが尽き穴を押し出る蟻の牙

どうせ死ぬ蟻で格闘に身を賭ける

蟻食ひを噛み殺したまゝ死んだ蟻

この鶴彬の「蟻食ひ」は「国家権力」を表現しており、「蟻」は庶民を表現しています。これは、鶴彬の「反戦川柳」です。

また現代川柳作家の中村富二（1912・1980）の現代川柳に「寓喩法」を用いた次の川柳があります。

仮面どつと燃え崩るる相抱く 中村 富二

この現代川柳の「仮面」は人間の「虚飾」を表現しています。他にも次のような「寓喩法」を用いた現代川柳があります。

あり余る時間が亀を亀にした 筒井 祥文

「弥勒菩薩」

真鍋心平太

着物をかけるくちた丸太
浴槽をかむ素朴な石の色
ぼろぼろになつた湯桁
石垣の間のおおぼこは
もうもうたる硫黄の湯気の中に
無気味にうなだれていた

私の裸体が湯気に包まれた時
そこに驚くべき塑像をみた
誰もいないと思つてゐたこの真昼の湯に
静かに彫り出されたる老人の姿
粗い石の壁によりかゝつてゐる老軀には
七十年の人生が時計のように動いてゐた。
首にまわされる左の手と
自然に垂れた右の手には
やがて来る裁きに対するあきらめがのつかつてゐた。

足はゆるく組まれて湯桁の上にある
おゝ、なんと厳肅な老人の像
再び開かないかの様に瞑黙せる眼
今は話すべき何も持たないようなその口
そして
秋の様に虚無で、桐の葉のように大きい手
あゝ、このまひるの湯で瞑黙せる老人よ

私は御身に話しかけたい
「お孫さんはおありですか」と
あゝ、こんな浅薄な愛の表示が
御身の確り握っている人生に対して
その人生の大きさに対し
一体何になろうか
私は御身の瞑黙をさまたげまい
不思議にも巡り来た御身の過去に対し
その過去を確り掴んでいる御身の老軀に対し
私は賞賛の感激を何処に送ろう
私は祝福祈祷を何処に捧げよう
秋である
十月である
今や御身の歴史に何の変化も及ぼさない秋である
御身の手の大きさに
私は長い人生を考へる
私は人生を考へる
御身の動かない像に
私は私を考へる
私は私の父を考へる

※これは井上靖の「まひるの湯で瞑黙せる老人」という詩です。
これを詠んだ時中宮寺の弥勒菩薩のお姿が心に浮かびました。
そして三十六才で亡くなつた私の父を想い、巻末の絵を描き
ました。

第20回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「予感」 島根写太 選
「帽子」 船木しげ子 選
「久しい」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「星」(短句) 互 選
(投句 各 2 句)

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。
<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。
会員登録は下記 URL より
https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから

投句開始 2024年12月9日(月) から
投句締切 2024年12月15日(日) まで
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
12月16日(月) ~ 12月19日(木)
披講発表 12月20日(金) から随時閲覧可能になります。



投句・閲覧



会員登録



鉛筆+パステル画

(中宮寺 弥勒菩薩像)
クリックで大きく表示

二〇二四年一月二十五日発行
ウェブ川柳天守閣会報

(発行責任者 真鍋心平太)

(編集人 真鍋心平太)

(事務所)

〒 520-0054

滋賀県大津市逢坂一丁目8-1

サンルシエル大津607号室

川柳天守閣

TEL・fax 077(532)4211

携帯 080(2672)4446